房総半島に自生するミツバツツジ類の山採りと民家移出の実態について

The Picking and Transplanting of *Rhododendron dilatatum* and *Rhododendron kiyosumense* on the Boso Peninsula, Chiba

古賀陽子* 小林達明**
Yoko KOGA, Tatsuaki KOBAYASHI

摘要：房総半島に自生するミツバツツジ類の山採りとその後の民家移出の実態について調査した。その結果、現在の分布域は新第三紀起源の砂岩・泥岩地域の小起伏山地域内に縮小していた。一方市内には自生区域で7割弱、市街地でも1割程度の民家でミツバツツジ類が植栽されており、その採取地や入手方法は自生地に近いほど地元の山採りが多かった。こうした山採りは1970年から1985年の間に激化するが、この時期は炭焼きの衰退や山間部の開発等により自生地周辺の農山村生活に変化が生じた。さらに臨海部で工業開発が進行したことを契機に既存市街地周辺で急速な人口増加が生じており、こうしたことがミツバツツジ類の庭木としての需要を増大させた。

1. はじめに

千葉県房総低山地域に自生するミツバツツジ節のミツバツツジ (*Rhododendron dilatatum* Miquel) とキヨスミツツジ (*Rhododendron kiyosumense* Makino) は、かつてこの地域の山野で普通に見られたが、主に山採りによって個体数は減少したといわれ^{14,15)}、現在「千葉県の保護上重要な野生生物」の中で要保護生物に指定されている¹¹⁾。

早春に房総低山地域を中心とした民家の庭先が赤紫色の花で彩られる景観は、自生するミツバツツジ類が山採りされ、大量に民家に流出した結果、形成されたものである。地元君津市では、このような植栽個体を生物資源や観光資源として積極的に利用し、ミツバツツジ節2種（以下、ミツバツツジ類）の苗木生産によって自生地の復元をはかる、「日本一のミツバツツジの里づくり」事業を展開してきた³⁾が、自生地復元を永続的に進めていくためには、その自生減少の原因を探り、対策を講じる必要がある。

既報では、生態学的知見からこれら2種の減少要因を明らかにした⁷⁾。本報は、自生の減少要因の一つであると考えられる山採りに着目し、民家の植栽個体の実態調査とミツバツツジ類庭木保有者へのヒアリング調査などから、そのメカニズムを明らかにしようとした。

2. 調査地の概況

調査は千葉県君津市を中心に行った（図-1）。

君津市は房総半島中部の東京湾側に位置し、小糸川流域および小櫃川上・中流域に広がる。市域の海拔高度は最高379mで、面積は318.8km²である⁴⁾。

気象条件は海岸部に近い久保で、年平均気温15.4℃・年平均湿度74.9%であり、房総低山地に位置する清澄では、同14.1℃・80.2%である^{2,13)}。

植生帯は暖温帯照葉樹林帯に属するが、市域の林地の大部分は二次的植生である落葉広葉樹が優占している。

3. 調査方法

君津市とその周辺部の民家に植栽されているミツバツツジ類の分布概略を把握するため、1999年の4月上旬（ミツバツツジの開花期）と4月下旬（キヨスミツツジの開花期）に広域植

栽調査を行ない、車窓から確認できる範囲でミツバツツジ類庭木を所有する民家を5万分の1地形図にプロットした。調査総延長は約320kmである。

さらに1998年と1999年の開花期に、調査地区を選び詳細植栽調査を行なった。調査地区はミツバツツジ類の自生区域、自生の境界区域、非自生区域に配慮し⁷⁾、小糸川と小櫃川の流域に上流から下流に向かってそれぞれ4箇所（計8箇所）を、ほぼ等間隔の配置となるよう考慮して設定した（図-1）。各調査地区における調査軒数は、小糸川流域で子安1031軒、三直127軒、清和市场282軒、豊英62軒であり、小櫃川流域では祇園534軒、下郡78軒、久留里51軒、笹76軒であった。各調査地区の概況を

図-1 調査地の概況

*千葉大学大学院自然科学研究科 **千葉大学園芸学部

表－１に示す。なお子安と祇園は戦後形成された住宅地であり、旧来からの農村地域である他の調査地区と比べて世帯数の増加が著しい。

住宅地図(1/4000)を携帯して調査地区内の民家を踏査し、ミツバツツジ類とヤマツツジ (*Rhododendron obtusum* (Lindley) Planchon var. *kaempferi* (Planchon) Willson) の所有の有無を確認するとともに、所有の確認できた民家ではミツバツツジ類とヤマツツジの所有本数を記録した。さらにその中から各調査地区につき 20 軒を抽出し (計 160 軒)、ミツバツツジ類の入手時期、入手方法、採取地について聞き取り調査を行った。

4. 結果と考察

(1) 分布域とその変化

地元住民への聞き取り調査結果から作成したミツバツツジ類の過去の分布域を図－２に示す。なお、現在の分布域は古賀(2000)¹⁾から引用した。図－２では、これらの植物のさらなる山採りを防ぐため、自生地が正確にわからないよう意図的に大きな円で示した。

図－２ ミツバツツジ節 2 種の過去と現在の分布域

表－１ 調査地区の概況

小糸川流域の概況				
	子安	三直	清和市场	豊英
地形	台地	平地	丘陵・平地	低山地
土地利用	住宅地・農業地域	農業地域	農林業地域	農林業地域
ミツバツツジ類	非自生区域	非自生区域	自生区域の端	自生区域
流域	下流域	下流域	中流域	上流域

小櫃川流域の概況				
	祇園	下郡	久留里	笹
地形	低地	丘陵地	台地・丘陵地	低山地
土地利用	住宅地	農業地域	農業地域	農林業地域
ミツバツツジ類	非自生区域	非自生区域	自生区域の端	自生区域
流域	下流部	中流部	中流部	上流域

これより、現在の分布域に比べて過去の分布域はより広いことがわかる。

さらに、土地分類図⁸⁾や数値地図⁹⁾、自然環境情報 GIS¹⁾といった既存資料を用いて過去の分布域の特徴を把握した。

その結果、過去の分布域には小起伏山地のほかに大起伏丘陵地が多く含まれており、その表層地質は主に新第三紀・第四紀起源の砂岩・泥岩層に対応していた。一方、砂礫・砂礫層・砂層など砂からなる未固結・固結の堆積層には過去にも自生が見られなかった。

とりわけ減少域 (過去から現在にかけて分布の縮小した地域)

図－３ 民家に植栽されたミツバツツジ節 2 種の分布

には現在わずかししか自生地の確認されていない大起伏丘陵地が多く含まれており、標高は150m以下であり、その表層地質は、第四紀の砂岩・泥岩層に対応していた。また周辺の植生は水田や針葉樹人工林が多かった。

以上より、本来ミツバツツジ類の天然の自生地は新第三紀・第四紀起源の砂岩・泥岩層地域に見られたが、大起伏丘陵地域を中心に両種の自生は減少し、現在の自生地は内陸の小起伏山地域内に縮小してしまった。

これより先、このような自生の減少要因について、主に山採りに着目しながら話を進める。

(2) ミツバツツジ類庭木の分布とその履歴

4月上旬（ミツバツツジの分布）と4月下旬（キョスミミツバツツジの分布）のミツバツツジ類庭木の分布概略を図-3に示す。4月上旬に252軒、下旬に269軒の民家で植栽を確認した。庭木としての両種は市全域に分布していることがわかった。

各調査地区の民家におけるミツバツツジ類およびヤマツツジの所有詳細を表-2に示す。ミツバツツジ類庭木の所有率は両流域とも上流部ほど高く、とくに自生地周辺では7割近い値を示した。また、民家1軒あたりの平均所有本数も上流部ほど高く、ミツバツツジ類の所有本数はヤマツツジより多い傾向にあった。小糸川流域ではミツバツツジの所有が目立ち、キョスミミツバツツジの所有本数は少なかった。小櫃川流域では、小糸川流域と比べてキョスミミツバツツジの所有本数が多かった。

このようなミツバツツジ類庭木の履歴をヒアリング調査から明らかにした。ミツバツツジ類庭木の入手時期、入手方法、採取地についてのヒアリング結果をそれぞれ図-4、表-3、表-4に示す。

入手時期は、いずれの調査地区でも1970年から1985年の間に

図-4 ミツバツツジ類庭木の入手時期

集中しており、全体の71.2%を占めた。このような傾向は特に市街地で強く、逆に市街地では1970年以前にミツバツツジ類を入手した民家は1軒も存在しなかった。一方、中流域や上流域では1970年以前の入手もみられ、比較的古くから存在するものもあった。しかし最古のものでさえ50年程であり、ほとんどのものが30数年から40年前に入手されたものであった。1986年以降に入手した民家は流域をあわせて23軒(15.8%)であり、ミツバツツジ類の庭木としての利用は、今から30年前から15年前の間に急速に広がったものであることがわかった。

入手方法は、本人が直接山から掘り取ってきたものを「山採り」、他人が山採りしたものを入手することを「他人から贈与」、業者から購入したものを「植木屋から購入」、実生から生産したものを「実生から」、入手方法のわからないものを「不明」という5つのカテゴリーに分類した。

両流域ともに、上流部ほど「山採り」の割合が高かった。とくに小糸川流域の豊英では、「不明」12.5%を除いて全てが「山採り」で占められた。子安や祇園のような市街地でも「山採り」の割合は20%近くを示した。

また両流域とも下流ほど「植木屋から購入」の割合が増加する傾向を示した。下流・中流部では「知人から贈与」「植木屋から購入」の割合が高く、間接的にミツバツツジ類を入手していることがわかった。

ミツバツツジ類庭木の入手方法は、どの地域でも「山採り」と「知人から贈与」で半数以上を占めた。

植栽されているミツバツツジ類の半数以上が房総由来の山採り品であることが示された。いずれの調査地区でも不明が20%ほどを占め、これは入手者の死亡や不在によるものであった。

採取地は「不明」を除いてすべてが県内に存在した。しかし「不明」の割合は、下流部の子安や祇園でそれぞれ63.2%と66.7%を示し、自生の境界ラインに位置する清和市場や久留里でさえも、それぞれ25.0%と54.5%と高い値を示した。これは、下流・中流部では入手方法

表-2 各調査地区における野生ツツジ類庭木の詳細

	ミツバツツジ類 庭木の所有率	所有民家1件あたりの平均所有本数		
		ミツバツツジ	キョスミツバツツジ	ヤマツツジ
(小糸川流域)				
子安	11.9(123/1031)	2.20	0.46	0.94
三直	29.9(38/127)	3.21	0.38	1.06
清和市場	42.9(121/282)	4.41	0.28	1.52
豊英	64.5(40/62)	9.09	3.23	2.68
(小櫃川流域)				
祇園	9.7(52/534)	1.15	0.66	0.31
下郡	38.5(30/78)	1.63	1.33	0.65
久留里	49.0(25/51)	1.82	2.79	0.61
笹	66.7(56/76)	5.86	5.12	1.38

*各調査地区におけるミツバツツジ類庭木の所有率は、(ミツバツツジ類庭木を所有する民家)/(全調査軒数)で求めた。

表-3 ミツバツツジ類庭木の入手方法

	小糸川流域				小櫃川流域			
	子安	三直	清和市場	豊英	祇園	下郡	久留里	笹
山採り	22.73	14.29	53.33	87.50	16.67	8.70	40.91	65.00
知人から贈与	22.73	47.62	-	-	33.33	39.13	40.91	10.00
植木屋から購入	45.45	23.81	13.33	-	25.00	30.43	13.64	10.00
実生から	-	-	6.67	-	4.17	-	-	-
不明	9.09	14.29	26.67	12.50	20.83	21.74	4.55	15.00
回答率(%)	100	100	75	80	100	100	100	100

*単位: %

表－４ ミツバツツジ類庭木の採取地

	小糸川流域					小櫃川流域		
	子安	三直	清和市场	豊英	祇園	下郡	久留里	笹
豊英	-	-	8.33	86.67	-	-	-	-
富津（豊英周辺）	10.53	-	8.33	6.67	-	-	-	-
清和市场	5.26	6.25	41.67	-	-	-	4.55	-
三島	-	31.25	8.33	-	4.76	-	4.55	-
高宕山	15.79	6.25	-	-	-	-	-	-
亀山	5.26	6.25	-	-	4.76	15.00	27.27	25.00
笹	-	6.25	-	-	-	5.00	4.55	50.00
清澄	-	-	-	-	9.52	-	-	5.00
久留里	-	-	-	-	4.76	5.00	-	-
その他（県内）	-	-	8.33	-	9.52	10.00	4.55	5.00
不明	63.16	43.75	25.00	6.67	66.67	65.00	54.55	15.00
回答率	100	100	75	80	100	100	100	100

*単位: %

が間接的であり、そもそも採取地を認識していなかったことが主な原因であると思われる。

上流部では採取地が地元集中在しており、「不明」の割合も比較的低いレベルに保たれていた。

（３）山採りのメカニズム

このような山採り行為の実態とメカニズムについてヒアリング調査から明らかにした（表－５）。

（い）山採りの実態

かつて、当地域のミツバツツジ類はごくありふれた雑木であった。春一番に美しい花を咲かせ、地元住民にその存在を広くアピールする以外には、だれかの関心に留まることはなかった。ミツバツツジ類に関する民話・伝承は存在せず、俗称に関しても岩の上に生育するため“イワツツジ”と呼ばれているに過ぎなかった。すなわち君津市においては、ミツバツツジ類を積極的に利用するような習俗はなかった。

このようなミツバツツジ類に人々の関心が集まり始めたのはここ 30 年ほどのことである。美しい花を目当てとした園芸目的の山採りが行われるようになったのである。この山採りは 1965 年ごろからはじまり、とくに 1970 年から 1985 年の間に激化した。山採りの行為者としては、表－３より、地元住民によるものが相当数あったことが予想されるが、そのほかヒアリング調査では多数の外来者による山採りがあったことが証言されている。また、私有地であれ、国有地であれ、共有地であれ、土地の所有形態を問わずにさまざまな場所で山採りが行なわれた。

ブーム時には、「小学生に 1 本 100 円で採らせ、大人が 700 円ほどで売りさばっていた（h さん）」、「山採りしたものを庭で育て、20 年くらい経ったものが 1 本 10 万円で売れた（h さん）」、「業者が 3 人くらいで盗りに来た。トラック満載に盗られるのを 2、3 回目撃した（e さん）」ということもあった。

このような山採りに対して、土地所有者（もしくは土地利用者）である地元住民は、「山（自分の土地・村有地・共有地）からミツバツツジを掘り出して（自分の）庭に植える（a さん）」ようになった。「他人の利益にされるのであれば、自分で所有しておこう」と考えたからである。また、あまり激しく採られるのを「かわいそうに思い」庭へ避難させた人もあった。

しかしこうして庭に移動させたミツバツツジ類でさえ、「昼下見して夜盗むミツバツツジ泥棒（h さん）」に狙われることがあった。朝になると庭木がこつ然と姿を消しているのである。

山採りの多くは造園業者や植木業者によって大規模に行われ、

現地に不慣れな業者のためには、「地元住民が（盗掘現場まで）案内をする（k さん）」こともあったようだ。

ミツバツツジ類は 1981 年に君津市の市制 10 周年の記念として市の花に指定された。市民投票による選定であり、この花が広く愛好されていたことがわかる。しかし制定直後に、新聞や広報で宣伝されたことによって、「第二次ミツバツツジブーム（h さん）」が生じた。これは、業者による大規模な山採りではなく、「市街地の人が“市の花を我が家にも”という理由から（h さん）」行なう個人的な掘り取りであった。このような状況は現在でもわずかながら続いている。

（ii）薪炭施業の衰退

ミツバツツジ類が、多くの人の関心を集めるようになった時、自生地を含む山間部の人と自然の関係にどのような変化があったのだろうか。炭焼き施業の衰退を通じて、山間部の生活形態の変化がミツバツツジ類の減少に与えた影響を探った。

市域の薪炭施業は、「1960～1970 年頃まで（a さん、e さん、h さん）」行われており、このような薪炭林内には「ミツバツツジ類が見られ（i さん、e さん、f さん、h さん）」、約 15～25 年周期で皆伐されると「萌芽再生を繰り返していた（e さん、f さん）」。

一方で、伐採を受けない崖地には「年代物のミツバツツジ類が残された（a さん、h さん）」。

薪炭施業は、林内環境を周期的に変化させ、下刈りや落ち葉かき・間伐は、ミツバツツジ類の好適立地の維持につながった⁷⁾。しかし、1970 年以降は燃料革命や市域の開発によって山村の生活は一変し、薪炭施業から工場勤務に転職する人が増加した。ミツバツツジ類の山採りは、このような時期に行われるようになったのである。

（iii）山間部の開発

山採りの激化は、山間部における土地利用形態の変化のみならず、開発とも密接な関係があった。すなわち開発は、自生地そのものを減少させるばかりでなく、林道や道路の建設によって山へのアクセスが容易となり、結果として大規模な山採りを可能としたのである。

ここでは山間部の開発として、林道（道路）開設とダム建設をとりあげる。ヒアリング調査の結果、自生の減少を招きうる開発行為として両者を挙げる意見が多かったためである。

ミツバツツジ類の自生減少に関連のある、自生区域内における 1960 年以降の林道開設件数^{6,12)}をみると（図－５）、1961 年から 1985 年にかけて開設件数は増加し、とりわけ 1976 年から 1985 年にかけて急増している。林道付近の山中に明らかに掘り取った際に捨てたと思われる枯枝が散乱していたという報告¹⁴⁾もあり、林道沿いで山採りされたものと推察される。

1973 年には、内房の国道と外房の道路を結ぶ房総スカイラインの工事が着工し、1979 年に完成した。b さんは 1973 年から 1978 年まで市内の道路建設に関わる仕事をしていたが、当時房総スカイライン周辺からミツバツツジ類を掘り採り、庭木として用いたそうである。

また、現在自生区域には、小糸川流域に三島ダムと豊英ダム、小櫃川流域に亀山ダムが存在するが、ヒアリング調査では、ミツバツツジ類庭木の採取地として、これらダムの所在地を挙げる回

答が多かった。特に、豊英ダムや亀山ダムの建設時期は山採りブームと重なっており、大規模な自生地喪失はもちろんのこと、工事の際、近隣に自生する個体を持ち去る者もあったと思われる。実際、三島ダムに面する岩壁には、多くの自生個体が確認されており、「三島湖岸の絶壁から、命綱をつけて盗掘する人がいた」という。

(iv) パトロール

地元住民は、このような山採りをだまってみていたわけではない。従来から自然資源に対する占有意識が低く、たとえ私有地や県有地であってもその場から山菜やキノコを採ることに深い罪悪感はなかった彼等でも、ブームの到来によってミツバツツジ類に一定の商品価値が見出されると、山間部のパトロールを行なうようになるのである。

旧清和村では、有線放送を用いた山採り防止活動がみられた。有線放送は1955年に開設され、1991年までの64年間、住民の連絡手段として活用されており¹⁰⁾、これがミツバツツジ類の山採り防止に用いられていたのは、「昭和38年(1963年)～45年(1970年)にかけての期間(kさん)」である。

監視の具体的な策は、「山採り者の侵入を有線放送によって住民に知らせ、行政センターの前で警官の立ち会いのもと捕らえる(kさん)」という方法であった。また山採りを未然に防ぐために、「携帯マイクを用いて“この地域内にあるイワツツジや自然のものを掘り出さないでください”とアナウンスしながら山(現在の清和県民の森あたり)を巡回した(kさん)」。当時は、「造園業者と思われる掘り取り専門家(kさん)」がトラック一杯にミツバツツジ類を持ち去っていくことが多かった。山採り者を取り押さえた後、掘り出されたミツバツツジ類は「没収され学校の校庭などに植えられた(kさん)」が、「その殆どが枯れてしまった

図－5 1960年以降の自生地域内における林道の開設件数

(kさん)」ようである。このような監視行為も、1970年に清和村が君津町になり、翌年君津市が誕生したことによって、行われなくなった。

(v) ミツバツツジ類の行方

このようにして山採りされたミツバツツジ類は、庭木として市内に広がっていった。

この背景として、1965年に臨海工業地帯に八幡製鐵株式会社(現新日鐵君津製鐵所)が参入し、市街地に新興住宅が増加した

表－5 1960年以降の君津市周辺の社会的背景とミツバツツジ類をめぐる動き

年	社会的背景	ミツバツツジ類をめぐる動き	山間部の生活*1			ミツバツツジの見られる風景*2		
			山採り	炭焼き	植林	山の風景	里の風景	街の風景
1960	千葉県立自然公園条例							
1965	八幡製鐵株式会社君津進出 清和村村有林を(清和県民の森用地として)千葉県に売却	大多喜町ミツバツツジを町の天然記念物に指定						
1969	豊英ダム竣工							
1970								
1971	君津市誕生							
1972	君津市公害防止条例							
1973	千葉県自然環境保全条例							
1974	清和県民の森キャンプ場オープン							
1976	元清澄山自然環境保全地域指定→→→→→ 三石山郷土環境保全地域指定	(野生動植物保護地区はミツバツツジ・キヨスミミツバツツジ・ヒカゲツツジの3種を対象に設置)						
1977	君津市自然保護及び緑化の促進に関する条例							
1979	房総スカイライン開通							
1981	亀山ダム竣工	君津市の市の花にミツバツツジを指定						
1985								
1989	房総リゾート地域整備構想							
1993	清和自然環境保全地域							
1995	千葉県環境基本条例制定 千葉県環境保全条例制定	君津による保全運動「ミツバツツジの里づくり」開始						
1996		ミツバツツジ保護条例制定						
1998	千葉県環境影響評価条例制定							

*1 線の太さは、活動の程度を示した。太線は活発な活動の行われていたことを示し、細線は活動が衰退していることを示す。

*2 線の太さは、存在するミツバツツジ類の量を示した。太線は、ミツバツツジ類の多く見られる風景を示し、細線はミツバツツジ類のあまり見られない風景を示す。

ことがあげられる。1965 年当時、君津市の世帯数と人口はそれぞれ 8897 戸・42574 人であったのに対し、5 年後の 1970 年には 15341 戸・70440 人と約 1.7 倍に膨れ上がった⁵⁾。また小糸川流域の各調査地区における、1973 年以降の世帯数も、市街地で急増している⁵⁾。

全国的に見ても、ミツバツツジ類のブームは、日本の高度経済成長の最中にあり、個人所得の増大と、それを基礎にした旺盛な住宅投資を背景に、植木の私的需要が拡大した時期⁶⁾であった。

この時期は 1971 年に環境庁が設置されるなど、いわゆる「第一次環境ブーム」のただ中でもあった。自然環境に対する関心の高まりが、山野草栽培ブームの契機となった。そうした関心の高まりが、自生地破壊を生み出したことは皮肉なことである。

5. おわりに

聞き取り調査より、過去にはミツバツツジ類の自生地は新第三紀・第四紀起源の砂岩・泥岩層地域に広く見られたことがわかった。しかし現在の分布域は小起伏山地域内に縮小していた。

一方、市内の民家には、自生地域で 7 割弱、市街地でも 1 割の民家でミツバツツジ類庭木が植栽されており、かつて大規模な山採り行為が行われ、掘り取られた個体が民家に流出したと考えることは想像に難くない。

そして、こうした山採りの背景には、自生地を含む山間部の生活形態や土地利用形態の変化に加え、都市部で生じた急速な都市化と自然環境への急速な関心の増大があった。今後、その社会経済的背景について検討を行なう予定である。

引用文献・引用資料

1) 環境庁自然保護局 (1997): 自然環境 GIS: 環境庁	7) 古賀陽子 (2000): 房総低山地に自生するミツバツツジ類の減少と保全に関する研究: 千葉大学大学院自然科学研究科修士論文, 76pp	99): 民有林林道台帳
2) 気象庁 (1986-1992): 気象庁年報: 財団法人日本気象協会	8) 国土庁土地局国土調査課 (1972): 復刻版土地分類図 12: 日本地図センター	13) 東京大学農学部演習林報告編さん委員会 (1986-1992): 演習林: 東京大学農学部付属演習林
3) 君津市 (1996-a): 日本一のミツバツツジの里づくり: 君津市	9) 国土地理院 (1997): 数値地図 50m メッシュ 標高: 日本地図センター	14) 藤平量郎 (1977): 元清澄山自然環境保全地域に於けるキョスミツバツツジ及びミツバツツジの分布: 千葉県自然環境保全地域等の設定及び保全対策に関する学術調査報告, 81-87
4) 君津市 (1996-b): 君津市史 自然編: 第一法規出版, 640pp	10) 清和村誌編纂委員会 (1976): 清和村誌: 清和村誌編纂委員会, 720pp	15) 沼田眞・大野正男監修 (1985): 房総の生物: 河出書房新社, 292pp
5) 君津市 (1997): 君津市統計書: 君津市	11) 千葉県環境部 (1999): 千葉県の保護上重要な野生生物: 千葉県, 435pp	16) 松田藤四郎 (1973): 緑化産業の新動向: 明文書房, 190pp
6) 君津市ふるさとみどり課所有 (1960-1999): 市営林道一覧表	12) 千葉県中部林業事務所所有 (1960-19	

Summary: The actual situation of both the wild and transplanted population of *Rhododendron dilatatum* and *Rhododendron kiyosumense* grown around Kimitsu city has been studied through fieldwork and interviews with local people. The results show that the geographical range of wild *R. dilatatum* and *R. kiyosumense* has become reduced. Those that have been transplanted from their native habitat are distributed widely throughout Kimitsu city. The number of people who are in possession of these two species becomes higher in the area closer to the native habitat. The collecting of these plants from their native habitat grew intensely during the period of 1970 to 1985. These plants have been used as garden plants, and they have rapidly spread out in the last 30 years. There are many means of obtaining these two species of *Rhododendron*. One of the means is by picking-plants. The closer the native ranges, the higher the percentage of these picking-plants. The other means are mainly through merchants and as gifts from acquaintances. A large number of individuals of the same species that were collected originally existed in low mountain areas in the Boso Peninsula. Almost all of the two species of *Rhododendron* close to the area of native habitat were found by picking-plants. It was a crucial time (1970-1985) when the picking-plants boomed, and great changes were made in the areas surrounding the native habitat. With the rapid industrialization of urban areas, the number of households has increased proportionally. These changes led to the transplanting of these two species of *Rhododendron* and brought about a decrease in their growing in the wild.